

学習場面における 子どもの自己選択能力 についての研究

上越教育大学 学部4年

佐々木 麻衣

0 . 本日の発表内容

1 . 研究の背景と目的

2 . アンケート調査

3 . 第1次調査

4 . 第2次調査

5 . 結論

6 . 今後の課題

1. 研究の背景と目的

～研究のきっかけ～



他者と関わること

同時に行うことはできない

1人で考える時は会話をすべきでない

1. 研究の背景と目的

～他者との関わり～

■ 川合(2000)

「教え合い・学び合い」の研究から、中学生がお互いの進歩の段階をふまえてアドバイスできること

■ 橋本(2002)

授業に関係のない会話から、きっかけの言葉を拾い出し、子ども自身が課題解決に結び付けていくこと

子どもの有能性

1. 研究の背景と目的

～ 子どもの意識 ～

■ 田辺 (2002)

子どもが授業時にもコミュニケーションによる人間関係構築を望んでいること

子どもは自由に学ぶ環境を
求めていること

1. 研究の背景と目的

～ 教師の意識 ～

■ 高田 (2001)

学力形成や向上は教師の指導力しだいである

■ 「学力低下」問題研究委員会 (2002)

学力低下の原因が、教職員や学校・家庭よりも子ども自身にあるということ

教師の指導の必要性

1. 研究の背景と目的

～ 研究の目的 ～

今行われている授業の実態を示し、

「学習場面において、子どもが自分自身の判断で『学ぶ手段』を選択できること」

を明らかにすることを目的とする。

2. アンケート調査

～ 調査方法 ～

■ 調査目的

学習場面において教師の子どもに対する対処方法から、教師の意識傾向を明らかにする。

■ 調査対象・期間

全国の「学校」(小学校・中学校・高等学校・大学)の教員
2003年11月から12月の期間

■ 調査内容

いくつかの授業場面を挙げ、各設問での子どもの行動に対してどのように対応するか質問した。

2. アンケート調査 ~ アンケート内容 ~

1. 個人作業をしている時

作業の時間になっても、何もせず話をしたり、立ち歩いている子ども

2. 個別学習(プリント学習)

各自問題を解いている時に話をしている子ども

3. グループ学習

グループで活動をしている時に、他の班の所に行っている子ども

2. アンケート調査

～ 結果と考察 ～

他者と関わることを良いと認める記述 (理由から)

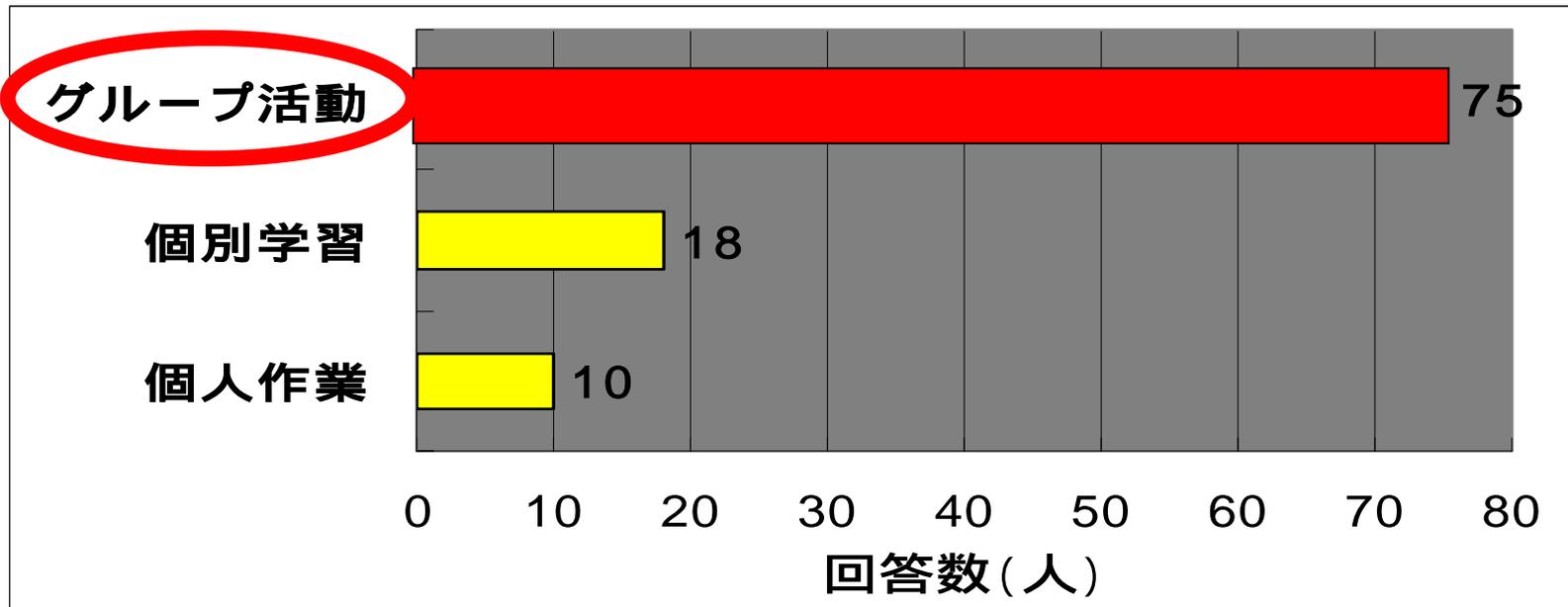
< 例 >

- ・ 見た内容を自分のグループに還元できる
- ・ きっと良い方法を見に行っているのではないかと思う
- ・ 情報を求め、立ち歩きをしているかもしれないから
- ・ 相談し合うのも良いことだから

etc...

2. アンケート調査

～ 結果と考察～



他者と関わることをグループ活動では
良いことだと認めている

2. アンケート調査 ~ 結果と考察 ~

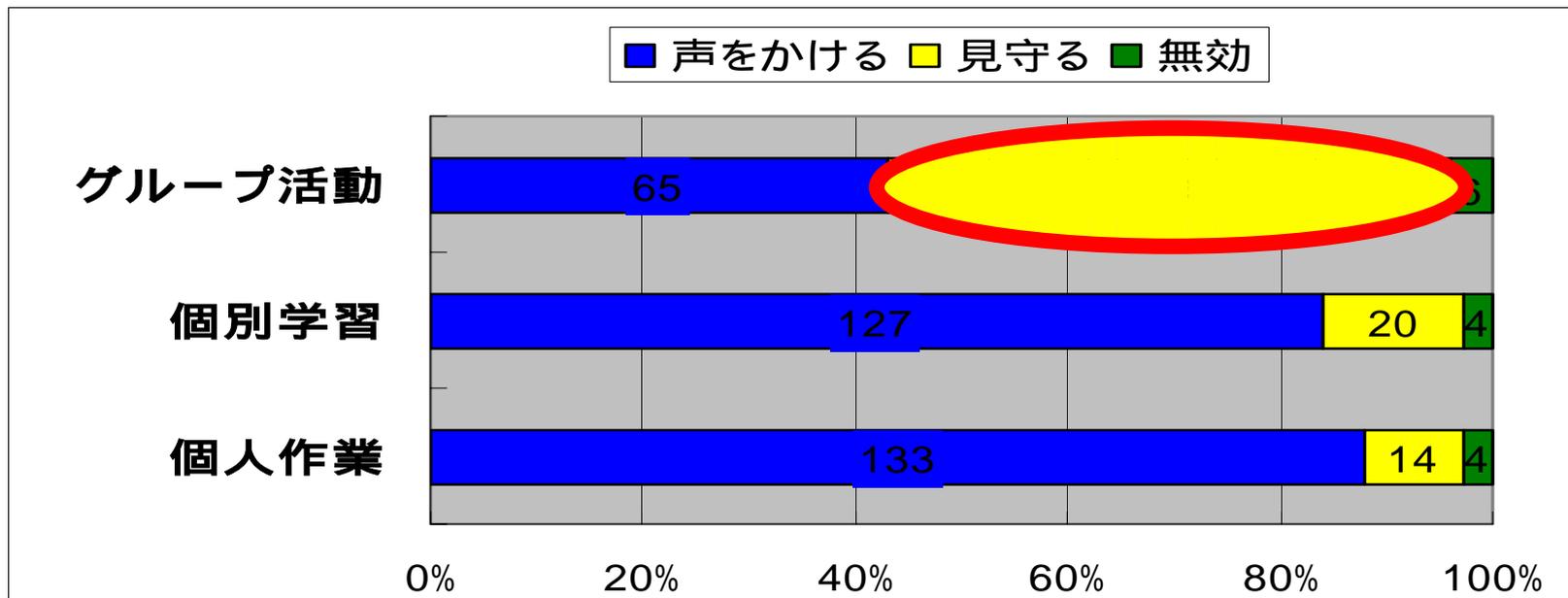
各場面での子どもの行動に対し、

< 声をかける > or < 様子を見る >

分類した。

2. アンケート調査

～ 結果と考察～



グループ学習時は子どもの行動に対し、声をかけずに様子を見守る場合が増える

2. アンケート調査

～まとめ～

『教師は、子ども1人1人が自分自身の判断
で学ぶ手段を選択する力を持っているとは
考えていないこと』

教師が指導しなければならないと考えられているの
が現状である。

3. 第1次調査

～ 調査方法 ～

■ 調査目的

自由に会話や立ち歩きができる授業においての、教師と子どもの関わりの実態を明らかにする。

■ 調査対象・期間

新潟県内公立小学校3年生1クラス(34人)

2002年12月の期間

■ 授業内容

音楽「いい音えらんで」の単元で、子ども達がりコーダーのテストのために各自自由に練習を行う。

3. 第1次調査

～ 結果と考察 ～

練習時間内の教師と子どもの関わりから、

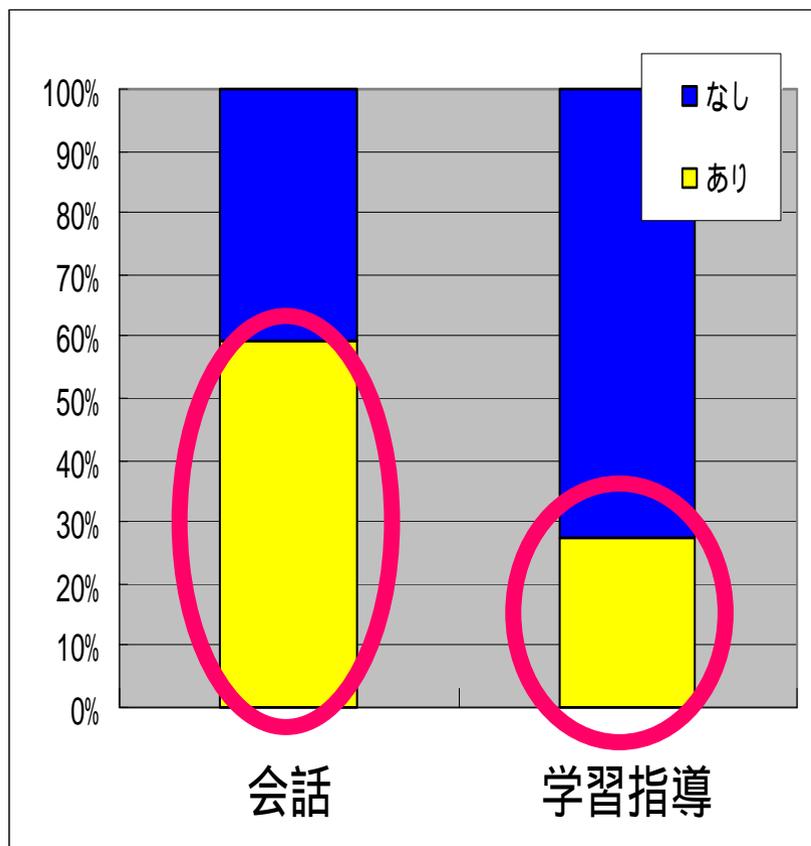
- 教師と子どもが実際にどの程度関わっているか

< 会話 >

< 学習指導 >

3. 第1次調査

～ 結果と考察 ～



< 会話 >

- 教師と直接会話できた
6割程度

< 学習指導 >

- 教師に学習指導を受けた
3割以下

3. 第1次調査

～まとめ～

- 以上のことから、

『子どもが自由に活動できる授業内では、
教師が子ども1人1人と直接関わり、指
導を行うことは難しいこと』

が明らかになった。

4. 第2次調査

～ 調査方法 ～

■ 調査目的

自由に活動できる授業内で、子どもは自分の判断で学ぶ手段を選択できるのか、子どもの自己選択能力の実態について明らかにする。

■ 調査対象・期間

新潟県内公立小学校3年生1クラス(34人)

2003年2月の期間

■ 授業内容

理科「つくってあそぼう」の単元で、子どもは磁石を使って各自自由におもちゃをつくる

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< 情報取得について >

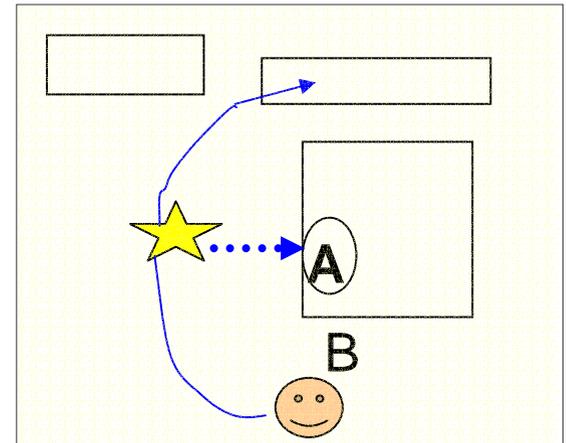
(1) ちらっと見ることを情報取得の方法にする

「ちらっと見ること」

相手と相談せず情報のみを
手に入れる行為

(例)

子ども同士による
情報取得の70%をしめる

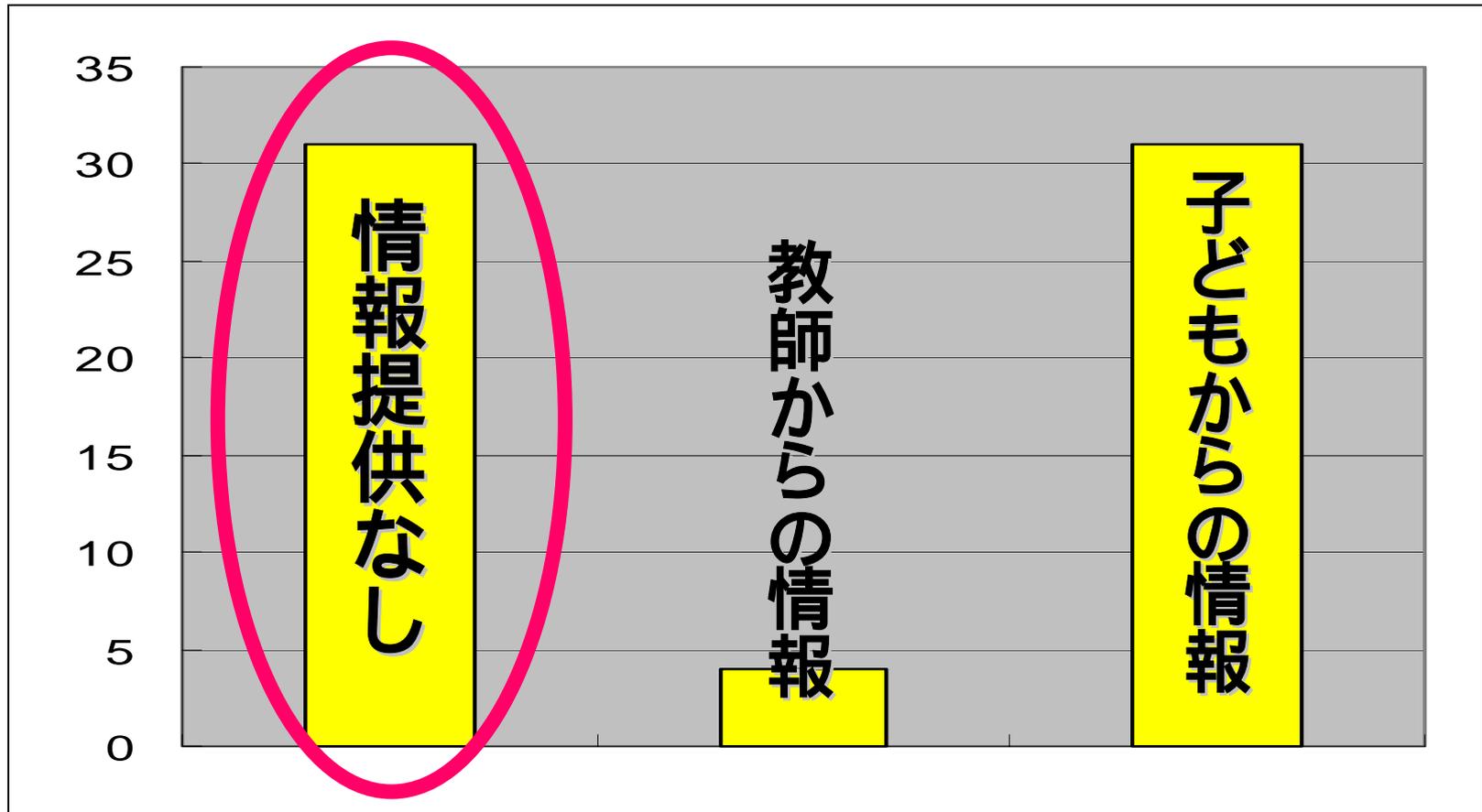


(2) 自分一人で考えることができる

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< 情報取得について >



自分1人で考えることができる

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< 情報取得について >

■ 以上のことから、

『子どもは他者と自由に関わることができる中でも自分に必要な形で情報を取得でき、自分1人で考えることもできること』

が明らかになった。

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< つまづきの解決 >

(3) 答えよりもヒントとして、情報を求める

(4) 自分に必要のない情報を遮断する

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< つまづきの解決 >

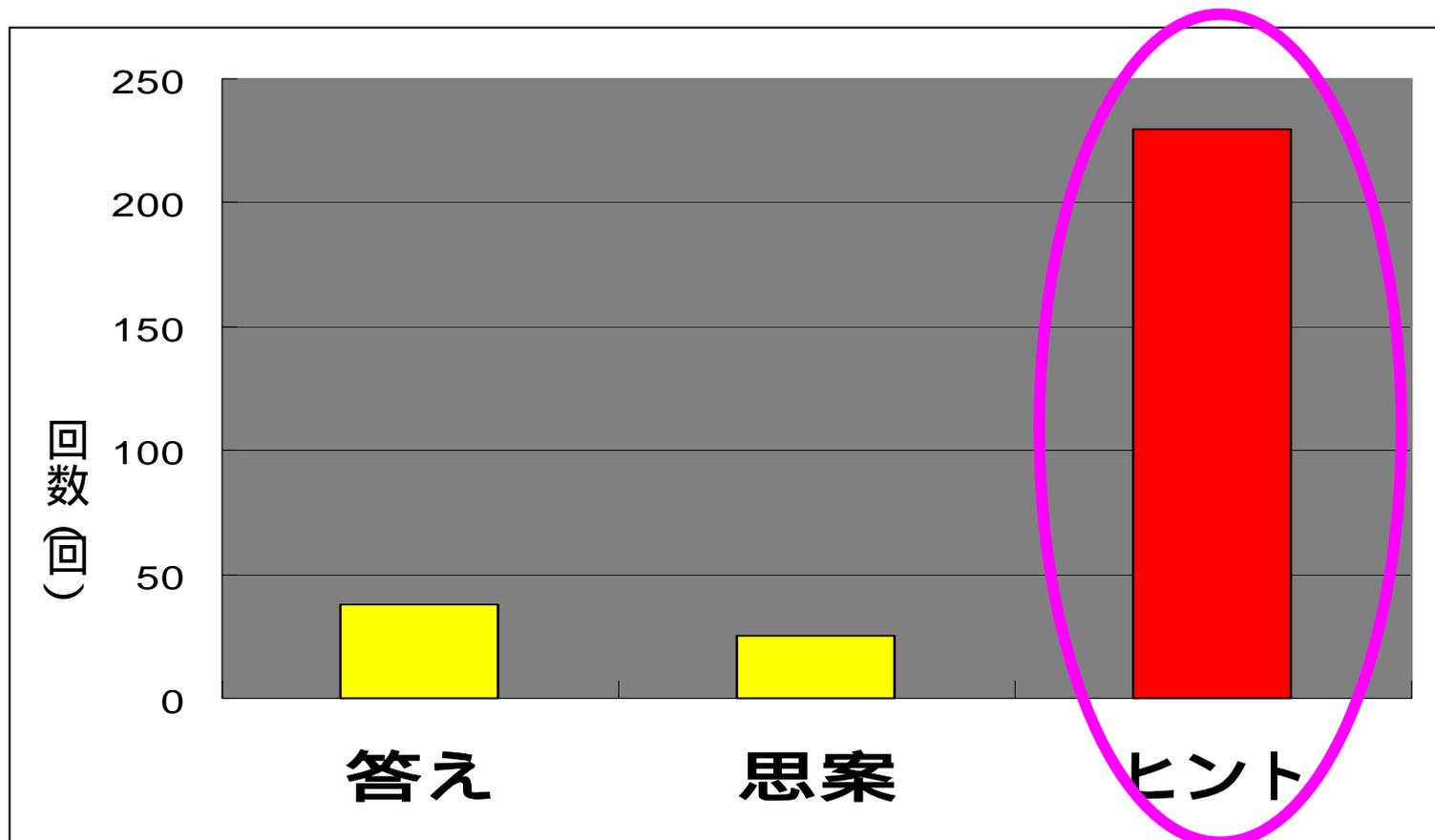
(3) 答えよりもヒントとして、情報を求める

- 「答え」 正解を求めて情報を必要としているもの
「教師」「教科書」
- 「思案」 1人で悩んでいるもの
「1人」
- 「ヒント」 相談や参考など、子どもからのきっかけを求めているもの
「同じ班の子」「他の班の子」「立ち歩き」

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< つまづきの解決 >



答えよりもヒントとして情報を求める

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< つまずきの解決 >

(4) 自分に必要のない情報を遮断する



4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< つまづきの解決 >

- 以上のことから、

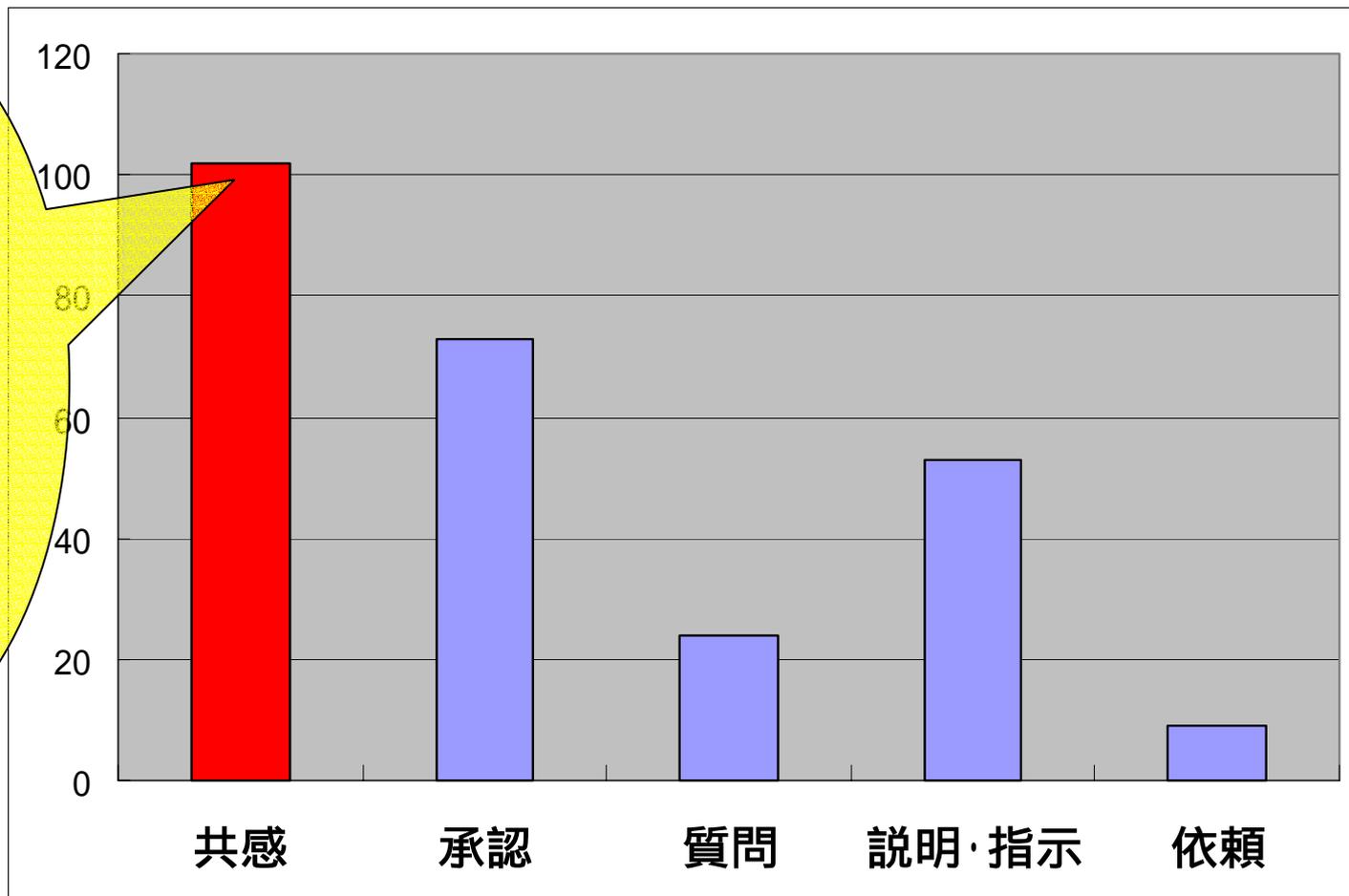
『子どもは課題につまづいた時、自分で解決するために必要な手段としてののみ、情報を求めること』

が明らかになった。

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< 教師の存在 >



共感(褒める)

この時の周りの
子どもの反応を
分析した。

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< 教師の存在 >

< 反応がある場合 >

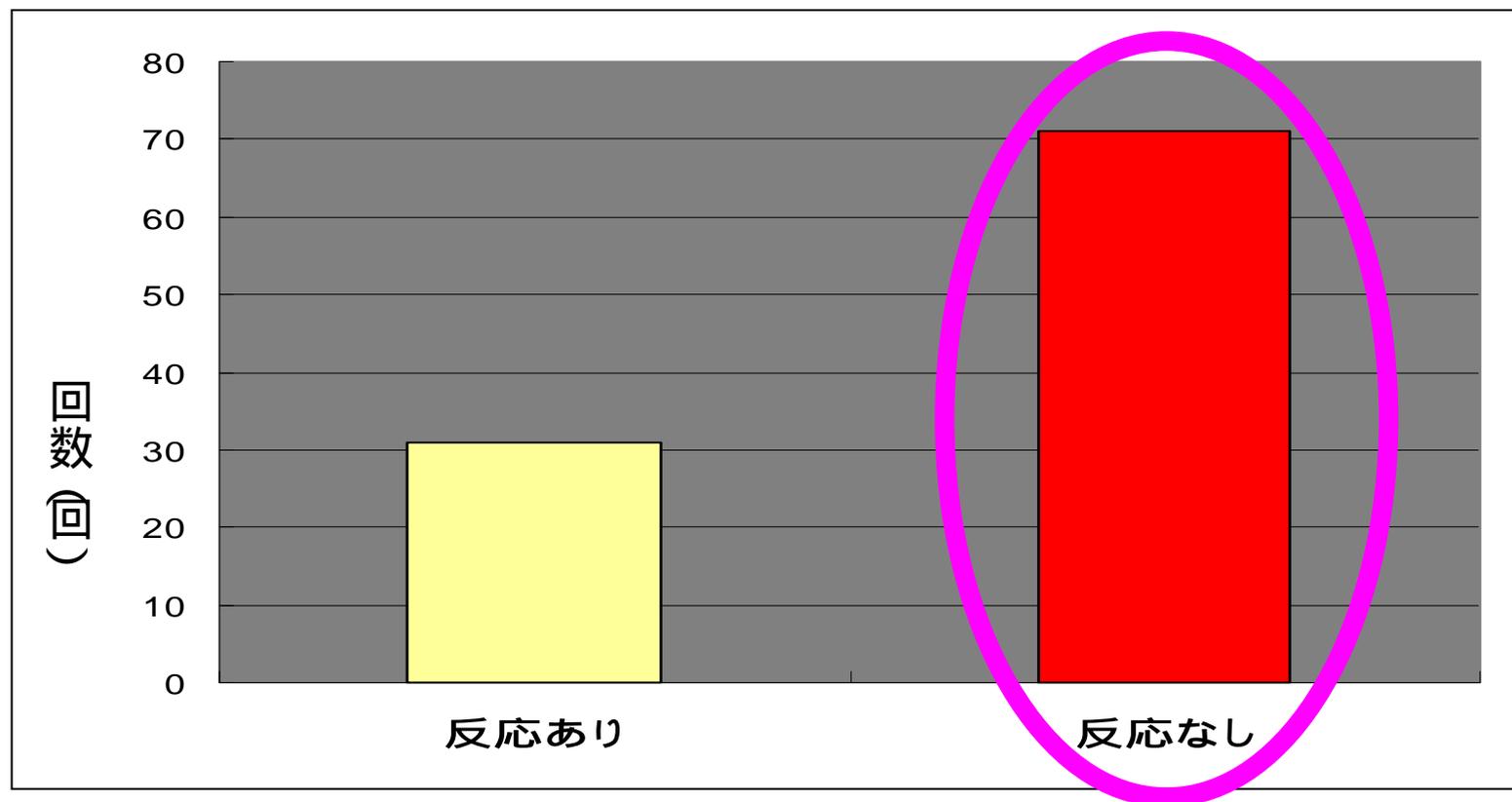
< 反応がない場合 >



4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< 教師の存在 >



教師からの情報を選択することができる

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< 教師の存在 >

(5) 教師からの情報を選択することができる
子どもが必要な情報だと判断した場合・・・



4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< 教師の存在 >



教師が褒めている場面をきっかけとして
みつけた情報を自分に必要なものとして
取り入れることができていた

4. 第2次調査

～ 結果と考察 ～

< 教師の存在 >

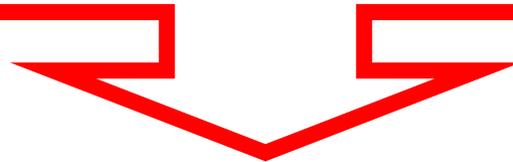
■ 以上のことから、

『子ども自身が学ぶ手段を選択できる授業の中では、「教師」も情報の1つとなること』

が明らかになった。

4. 第2次調査 ~ まとめ ~

子どもは自由に手段を選択できる授業の中では、自分の判断で、必要に応じて「学ぶ手段」を選択する力をもっていること。



- そのためには今まで以上に、
自由に手段を選択できる環境が必要となる

5 . 結論

- 『子どもは、自由に会話や立ち歩きができる環境の中で、自分に必要な手段を選択し、自分の力で課題を解決できること』

が明らかになった。

6. 今後の課題

- 「教師が褒める」場面にはさまざまな形がある。今後は、教師の伝え方・情報の与え方の違いによって、子どもにどのような変化があるのか取り上げていきたい。